

備陽史探訪の会平成二十三年度一泊旅行資料

(平成二十三年十一月十二日・十三日実施)

東近江紀行

甲賀の里と土山宿、巨大山城を歩く



旅行委員 田口 義之

主催備陽史探訪の会

# 旅行日程、注意事項

十一月十二日

七時一五分 福山駅北口発

七時半 福山東インター

(山陽道・名神・新名神)途中竜野西・大津で五分トイレ休憩

十一時

新名神甲南インター

十一時一五分 和田城址・公方屋敷

十二時半 油日神社(昼食)

十四時 同発

十四時半 垂水頼宮跡

十五時 同発

十五時一五分 土山文化センター

十五時四五分 同発

十六時 東海道「土山宿」

十七時 同発

十七時半 国民宿舎「かもしか荘」

十一月十三日

八時 「かもしか荘」発

八時半 あかね古墳公園

九時 同発

九時半 観音寺城下着

十時半 観音正寺

(この間、観音寺城跡見学)

十二時 観音正寺で昼食

十三時 同発

(桑実寺經由徒歩)

十四時半 安土城博物館

十五時半 同発

十九時半 福山駅北口着解散

## 注意事項

一、集合時間厳守のこと

二、「こみ」は各自で持ち帰ります

三、気分が悪くなった方や怪我をされた場合は、直ちに事務局に申し出てくださる。

四、雨天の場合には予定を変更する場合があります

五、迷子になった場合は、田口会長  又は藤井事務局

長  に直ちに連絡してください。

# 和田城跡

甲賀町和田小字杵ヶ谷

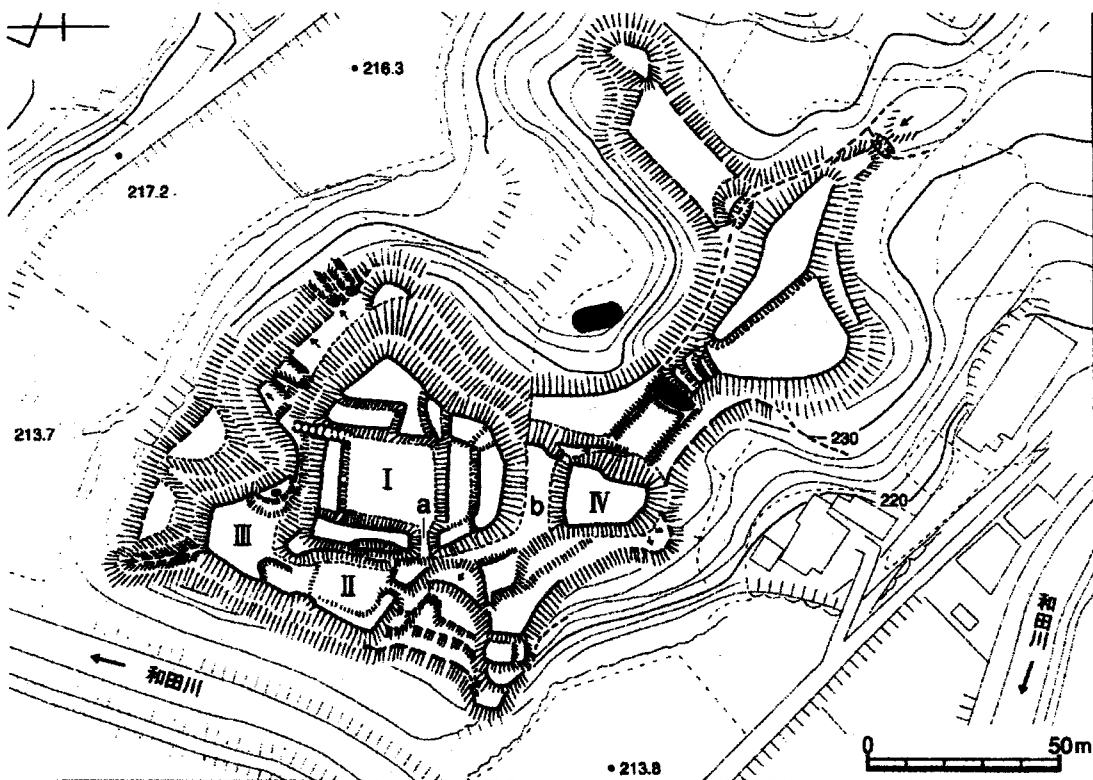
和田城は甲賀町和田にあり、和田川の右岸に構えられた城館群の中で最も奥部に位置し、和田川が南から西に蛇行する部分に突出した丘陵の先端部、標高二四三・五メートルの場所に築かれている。市指定史跡。

その構造は丘陵頂部に方形プランの城郭を構え、その外方に曲輪を付属させたものである。中心となる方形の曲輪①は一辺約五〇メートルを測る。その四方には土塁がめぐる。通常四方にめぐらされた土塁は均等な幅や高さとなるが、和田城では四方がすべて異なる構造となる。南辺土塁は幅約二〇メートル、高さ約七メートルを測る巨大なもので、単なる土塁ではなく、尾根続きの南方に対して脱みを利かす構などが建てられていた可能性が高い。あるいはその幅から主部よりも高く構えられた詰丸的な機能を有していた小曲輪とも考えられる。

これに続いて西面と東面の土塁がほぼ同規模で構えられているが、東面の土塁は上面幅が約一八メートルと広く、これも南面と同様、何らかの建物が構えられていたと考えられる。なお、北面の土塁は最も低く構えられている。

西面土塁が南端で開口しているところが虎口<sup>㉑</sup>と見てよい。この虎口前面には虎口受けが構えられ、西側の腰曲輪<sup>㉒</sup>とを結んでいる。城道はさらに北側の曲輪<sup>㉓</sup>を経て城の北側谷部から山麓に至るものと想定できる。小規模ながら手の込んだ造りとなつている。なお、曲輪<sup>㉔</sup>の谷側に円形の窪みがあり、井戸跡の可能性もある。

城の南側背面の処理については、曲輪<sup>㉑</sup>の南面土塁の外方に幅約一〇メートル、深さ約七メートルに及ぶ巨大な堀切<sup>㉕</sup>が設けられている。城域の設定は一応この堀切と考えられるが、堀切の南側には削平地<sup>㉖</sup>がある。頂部は見事に削平されており曲輪と判断できるが、その外方には自然の鞍部が位置するものの人為的な施設は認めら



和田城跡略測図

れない。

和田城は和田谷の他の城館と連動して機能していたことは間違いない。特に最奥部に位置し、土塁も複雑な構造であることより、その中心的な城であったと考えられる。

元龜三(一五七二)年十一月十四日に造立され、織田信長によって尾張熱田へ持ち去られた油日大明神(油日神社)の鐘銘に和田衆として山持惟好、伊予入道惟、金次郎惟綱、又六郎惟持の名が見えるが、『愛知県金石文集』、こうした一族が和田谷にそれぞれ居城を構え、それらが一つの城として機能していたのではないだろうか。

## 公方屋敷跡

甲賀町和田小字門田

公方屋敷は甲賀町和田にあり、和田谷の咽喉部にあたる通称「殿山」の南西側谷部に位置している。市指定史跡。

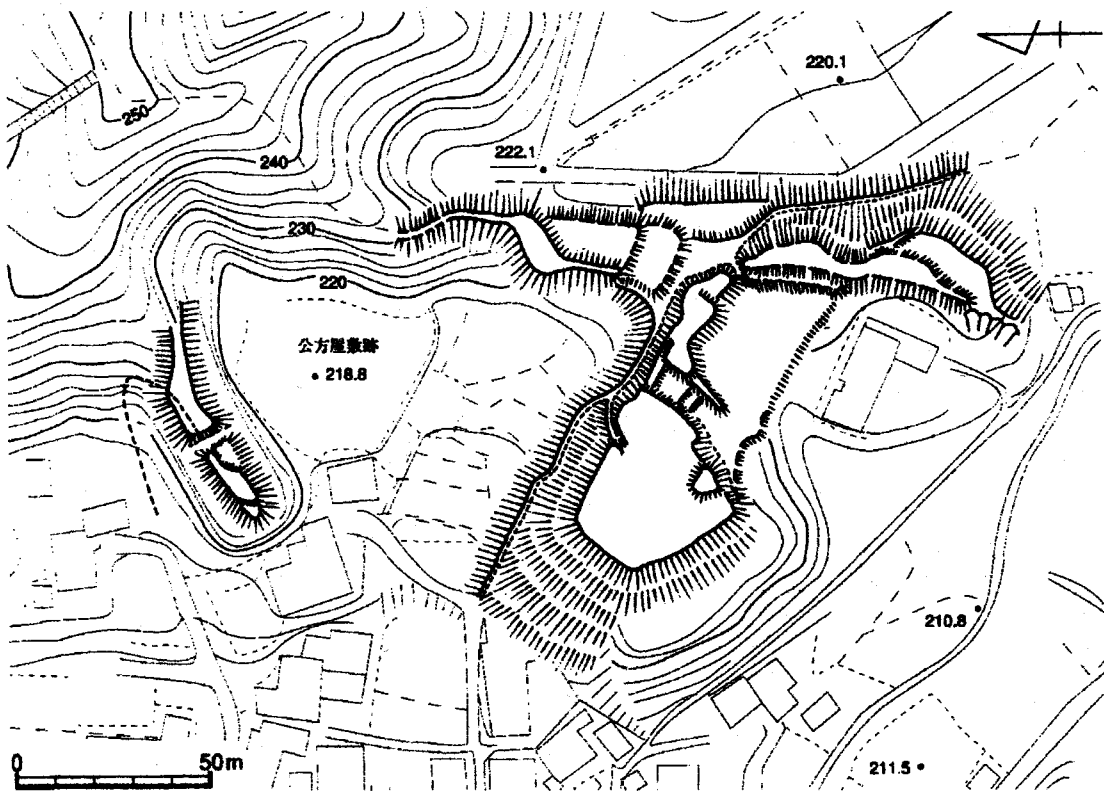
この小さな谷は、北・東・南の三面に山を負い、西側のみが和田谷に向かって開口している。屋敷跡はその懐に抱かれるような位置にある。現在は広場状の平坦地と畑地となり、東西七五メートル、南北八〇メートルを測る。その一角には樹木が植えられ「公方屋敷旧蹟」と記した石碑が建つ。また井戸が二カ所確認されており、南の井戸からは漆碗が発見されたと伝えられる。

『多聞院日記』の永祿八(二五五五)年七月二十八日条に、「廿八日夜、一乗院覚慶僧都

廿九才、寺を御離れおわんぬ、御落所習日にもしれず、甲賀の和多加城へ入れおわんぬ」とあり、室町幕府第十三代將軍足利義輝の弟で、当時興福寺一乗院の門跡となり、義輝暗殺

後は幽閉状態にあった覚慶は、義輝の家臣となっていた和田惟政らの誘導で奈良を脱

出。一時滞在したのが甲賀にあった和田氏の屋敷であった。覚慶は当地にしばらく滞在したのち、野洲郡矢島(守山市)に移



公方屋敷略測図

り、蓄髪して義秋と名乗り、永祿十一年には織田信長らの援助を得て義昭と改め、第十五代將軍となった。「公方屋敷」の名はのちに將軍(公方)となった覺慶が一時滞在したことによる。

天保八(一人三七)年の「和田村絵図」(『片瀨家文書』)には、当地にあたる場所に「公方屋敷」と記されていて、その呼称が少なくとも近世後期にさかのぼることがわかる。しかし、小瀬市庵の『信長記』には、「角て藤孝供奉し江州和田いづみが館へ入給う」と記されている。つまりそれは、「和田いづみ館」「和田泉か亭」とも呼ばれており、覺慶を迎えるために築かれたものではなく、それ以前は和田氏の居館であった可能性がある。『甲賀郡志』もこれを「和田氏館址」として立項している。

公方屋敷は他の甲賀の城館とは様相を異にし、その立地が村落背後の丘陵先端や平地集落の中心部ではなく、山麓谷部であることは注目される。この立地は、通常の戦国時代の「詰」と「居館」という、二元的構造の居館部に相当するが、背後の殿山山頂部には城郭遺構は存在しない。

和田谷には本書で紹介するように数多くの城が分布している。こうした城館は、個々の城が別々に存在するのではなく、和田の谷全城を守るために配置されたと考えられる。つまり、和田谷が一つの城として機能していたのである。そうであるならば、和田氏は後述する和田城を居館としていたわけではなく、谷筋に城とは別に居館を構えていたことは十分に考えられることである。谷筋より少し上がり、正面以外の三方はすべて山に守られているという「公方屋敷」がそれであった可能性は高い。

なお、和田谷の城館について、今回改めて精査した結果、従来その存在が指摘されていた「公方屋敷城」と「棚田山城」は城郭遺跡ではないと判断した。

## 甲賀郡中惣とは

戦国時代の甲賀郡は、一般に「土豪」「地侍」と呼ばれる在地小領主が割拠していた地域である。当時彼らは「甲賀衆」といい、江戸時代には「甲賀十三家」「甲賀二十一家」などと称されるが、そのように呼ばれるに至った由縁は、十五世紀代にまでさかのぼる。十五世紀中頃、京都で応仁の乱が勃発し、各地は戦国時代へと突入する。近江においては北に京極氏、南に守護六角氏が勢力を張っており、六角氏守護権力はいまだ健在であった。近江では、他国のように実力をつけた守護代が守護を追い出すような下剋上は見られなかったが、近江南部に数多く存在する延暦寺領などの荘園は、守護六角高頼の家臣によって押領される事態が頻発していた。時の幕府將軍足利義尚は、幕府の権威回復をねらい、長享元(一四八七)年に自ら近江へと出陣した(第一次六角征伐)。

幕府軍は栗太郎の鉤に本陣を敷いたが、これに対し六角高頼は本拠観音寺城で戦うことはなく、甲賀郡へと退きつつ抵抗した。この時高頼を支援したのが甲賀衆(甲賀武士)であり、彼らの働きにより、幕府軍は高頼を討伐することはできず、和議という形で収束したとの伝承を持つ。江戸時代の由緒書は、この時活躍した甲賀衆を「甲賀五十三家」、特に武勲のあつた家が「甲賀二十一家」と記しているのである。

このように、甲賀衆は有事において守護六角氏を支援し、中には六角氏の家臣として活躍していた者も存在した。しかし、彼らのすべてが六角氏直属の家臣となっていたわけではなく、彼らは彼らで六角氏とは一定の距離を置く存在としてまとまっていた。以後、甲賀衆は戦国時代末期にかけて領主間で連合し、合議によって意思決定される地域的一揆体制を徐々に確立させていった。これを「甲賀郡中惣」と呼んでいる。(以上『甲賀市史』より)

# 油日神社

甲賀市甲賀町油日

御祭神

油日神

〔配祀神〕猿田彦神 罔象女神

御神紋

木瓜に二ツ引

御由緒

ご神徳、天地創成の母胎である「アブラ」に宿る「ヒ」（日、火、霊）の大御魂と戴き、萬象根元の神、諸願成就の神、油の祖神と仰ぐ。

創祀、国史見在社 三大実録に「元慶元年十二月陽成天皇丁酉朔三日己巳授近江国正六位上油日神從五位下」と。社伝縁起には用明或いは天武の朝と言う。住吉は油日岳を神山として奉祀。

朝野の崇敬、元慶以降天下諸神増一階の都度に増階に預り、明応二年土棟の本殿棟札には「正一位油日大明神」とある。円融天皇天元年には橘朝臣敏保卿が勅を奉じて参向。

中世文書に「江州に無隠大社」「甲賀の総社」とあり、明応再建本殿の奉加には郡内一円三四七名から米一八五石五斗六升五合、金子四一貫四〇〇文その他が寄進され、毎年の油日まつりには甲賀武士の中から五頭殿が巡年参向、天正十四年には「甲賀中惣」より永代

神領百石の寄進、甲賀武士五十三家はその総氏神として尊信、幕末には神前に血判の盟約書をささげている。都内有名古社との間には親子の縁を称し、分霊と伝え、祭日を特定するなど広い崇敬の跡を残している。

神領、正徳五年覚帳に「油日大明神境内御除地十一町三反七畝歩」と除地証文に「野山御除地千百三十四町歩」の山手米にて祭礼費用に充つとある。

旧社格、明治三十九年七月県社に列格。

撰末社、白鬚神社御祭神猿田彦神は油日神鎮座のサキダケ彦として祭祀、永正七年再興の棟札あり、神体山頂上の岳神社には油日神荒御魂及び罔象女神を祭る。境内神社は明治四十四年村内の十社を合祀、祖霊社は昭和二十五年氏子の祖霊を祀る。現社家慶長十一年神道裁許状吉次より十九代

本殿・境内建物  
〔本殿〕三間社流造 間口三間 奥行三間（重文）  
〔拝殿〕一重入母屋造妻入正面及背面唐破風付 間口三間 奥行三間（重文）

〔その他〕楼門（重文）廻廊（重文）中門 神饌殿 神楽殿 宝蔵庫神輿庫 鐘楼 参集殿 手水舎 資料館 社務所  
境内社（撰社・末社）  
八幡神社 神明神社 日吉神社 春日神社 金比羅神社 桜神社 常松神社 祖霊社（境外） 白鬚神社 岳神社

主な祭礼  
油日の太鼓踊（国選択） 奴振り（県選択） み生まれまつり 油まつり  
祭礼日  
祭礼日は神事（祭儀）のみ行ない、御神輿・山車・露店などは別の日に出る場合があります。お出かけの際は念のため神社にお尋ねください。

5月1日 油日祭り  
3月1日の頭子選びから始まり、4月14日の獅子の出初め式を経て、5月1日の祭礼を迎える。役は騎乗の頭殿以下六十余人から構成され、行列をなして社参する。宮立式・神輿渡御・列結野御旅所での山の舞いに引き続いて、頭殿の古式に基づいた幣振りが執り行われる（奴振りとも呼ばれる）。

9月13日 大宮こもり  
氏子をはじめ油業界・崇拜者から献上された油と灯明による千数百の燈明は、夕刻から深夜に至るまで点され、境内や参拝者を照らす。豊作祈願の祭りであるが、油日神を祀るところから万燈講として行

われるようになったという。各字ごとに設けられた座では御神酒を飲み、境内では氏子青年による神賑行事も加わり祭り気分を盛りあげる。昔は廻廊に蚊帳を吊り、一晚中籠もった。(滋賀県神社本庁のホームページより)

## 齋王群行と垂水頓宮

葱華葦に身を委ねた齋王が甲賀路をゆく艶やかな宮廷行列。

『延書齋官式』によれば、甲賀頓宮を出発した齋王一行は、鈴鹿峠を越える前に垂水頓宮で宿泊する規定を記している。また『西宮記』には、昌泰二年(八八九)九月八日の夜に京都を出発した一行が十一日には垂水に泊まったことが記されている。

平安遷都後の仁和二年(八八六)六月、大和経由の伊勢路から古来の東海道のルートであった倉廩道(油日越)に替わり、新たに「阿須波道」が開通(『日本三代実録』)。同年九月には伊勢齋内親王(光孝天皇の皇女繁子内親王)を皮切りに、文永元年(一一六四)の龜山天皇の御代までの三七八年間に三十一人の齋王がこの道を通っている。

垂水齋王頓宮跡は、現在の東海道である国道一号線に沿った丘陵上にあり、東西六十四段、南北七十三段のいびつな方形区画に、高さ一畝余の土塁がめぐり、その平坦な内部には井戸跡が一基確認されている。未調査のため建物などの構造は明らかではないが、かなりの規模をもつ施設であったと推定されている。

垂水頓宮の様子を窺う史料には、長暦二年(一一〇三)、後朱雀天皇の皇女良子内親王の群行時に随行した齋宮勅別当藤原資房の日記『春記』九月二十五日条に、黒木で建設された優れた建物があつたことが記されている。(『甲賀を紐解く』より)

## 内田康夫『齋王の葬列』

### プロローグ

野元末治が「御古址」(垂水齋王頓宮址)の森で無惨な死に方をした夜は、夜半過ぎてからほんの短い

時間、鈴鹿山系特有の叩きつけるような雨が降った。雨は未明には上がり、翌朝は雲一つない日本晴れになった。

この日、東京では皇太子のご成婚が行なわれ、日本中がその話蓮で持ちきりであった。午前十時から賢所で結婚の儀が、午後二時三十分からはパレードが行なわれ、その模様はテレビでも中継された。皇太子ご夫妻を乗せた六頭立ての馬車が、沿道を埋めた大観衆の歓呼の中を進む光景は、戦後の苦難が終わりを告げ、新しい日本のスタートを象徴するように、美しくも華やかなものであった。

野元末治の死体は、テレビ中継が始まる寸前、御古址の近くで茶畑を栽培する農家の夫婦が発見した。

発見された時、末治は雨に打たれ、泥の飛沫を浴びて黒く染まっていた。仰向けになった顔の額から上の右半分は、コンクリート塊の一撃をくつてザタロのように無惨に潰され、血渠とも脳味噌とも判別できない、白茶けた粘液状のものが、黒い地面にドロリと垂れていた。

不気味なことに、末治のカツと見開いたままの眼窩の上を、甲羅の赤黒い沢ガコがモソモソと這、っている。茨のとげのように尖った足が黒目の上を歩いたときは、夫婦は思わず目を閉じた。

夫婦の知らせで駐在が駆けつけたが、それより先に、近隣から野次馬が集まって、死体を取り囲んでいた。

死体の脇には「凶器」となった鳥居の残骸が転がっていた。以前から老朽化を指摘されたまま放置してあったのが、何かのショックで倒壊したのだろう。昨夜は雷も鳴っていたから、ひよつとするとそれが原因かもしれない。その下にたまたま末治がいあわせたのは不運としか言いようがないが、野次馬の後ろのほうから覗き込んでいた老人は「御古址の崇りや」と、恐ろしげに呟いた。御古址は一

木一草たりとも冒してはならないのが、いにしえからの定めであるのに、その禁を破ったから、罰が当たったにちがいないというのである。みんなも領いて、寒そうに首をすくめながら御古址の森を見回した。(略)(新潮文庫版より)

## 東海道土山宿

「坂は照る照る鈴鹿は曇るあいの土山雨が降る」と鈴鹿馬子唄に唄われる土山。

歌川広重の浮世絵に描かれる土山の姿は、鈴鹿馬子唄にも共通して、やはり雨の降りしきる中、田村永代板橋を渡り蓑笠姿で伊勢路を急ぐ旅人の姿だ。

土山は古く平安の時代から京と伊勢を結ぶ交通の要衝として栄え、鈴鹿峠を控えた街道の難所として、峠を越える旅人で賑わった。

土山の地名は、中世紀行文の中にも見え、室町時代より街道筋に集落を形成していたと考えられる。

土山宿には、本陣や脇本陣、旅籠屋などの宿泊施設や問屋場、高札場が置かれ、宿駅としての機能が整えられていた。

本陣には土山本陣(土山氏)と大黒屋本陣(立岡氏)の二軒があり、土山本陣は寛永十一年(一六三四)三代將軍家光が上洛の折に設けられ、初代土山喜左衛門が本陣職に任命。明治三年の廃業まで代々世襲された。現在でも上段の間や庭などが当時のまま保存され、休泊者を記録した「宿帳」、本陣の玄関や宿の入口に掲げられていた「関札」などの貴重な資料が大切に保存されている。

大黒屋本陣は、旅籠屋であった大黒屋が江戸後期の交通量の増加に伴い、本陣に指定されたと考えられている。

また、土山宿は東海道と中山道を結ぶ御代参街道の分岐点であり、多賀大社への参詣や街道沿いの近江商人たちに利用され、往時の道標が今も残されている。

宿場の名物には、お茶、御六櫛、蟹ヶ坂飴などがあり、名所図会



や紀行文などに紹介されている。

安藤広重東海道五十三次「土山宿」



# 斎王の葬列



## 内田康夫

### 国民宿舎「かもしか荘」

ロケ隊のその夜の宿は、野洲川を遡った野洲川ダムに近い、大原という集落にある国民宿舎「かもしか荘」である。長屋明正は自分の車でロケ隊にくっついて「かもしか荘」までやって来て、晩飯の席にもちやつかり入り込んでいた。

どうやら本人としては、ロケ隊ととことん行動を共にするつもりでいるらしい。招かれざる客もいところだが、白井はこの際もスタッフの疑問を抑えるようにして、明正を迎え入れている。

「まあ、ロケ場所を紹介してくれたのは長屋なのだから、メシぐらい一緒にしてもいいんじゃないの」

かもしか荘は「ぼたん鍋」が売り物で、その夜の食卓のメインデ

イッシュュだった。しかし、若い連中が多いだけに、肉の量が物足りない。それを見て、長屋が十人前の肉を追加注文をした。ついでにビール・ダースも差し入れて、「ここから先はおれの奢り」と、気前のいいところを見せた。

現金なもので、長屋にいい感じを抱いていなかった連中まで、掌を返すような世辞を言ったりした。(内田康彦『斎王の葬列』より)

### 蒲生あかね古墳公園

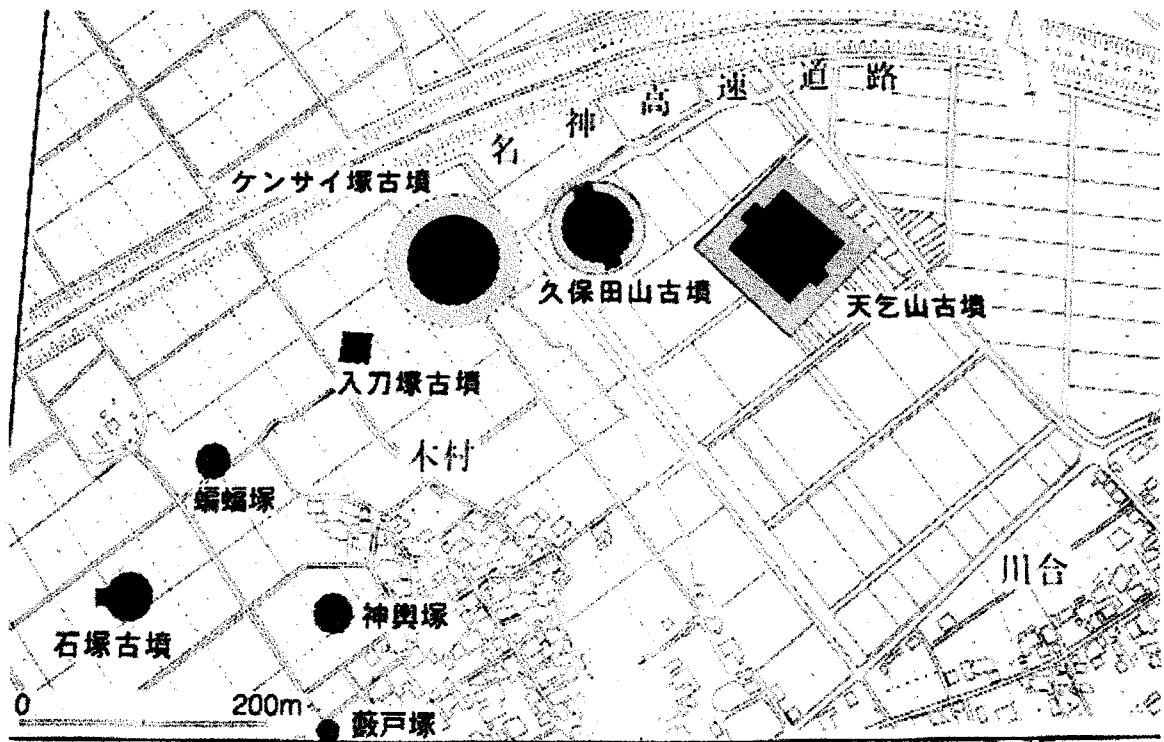
田園の古墳群一木村古墳群一(東近江市川合町) 名神高速道路下りの黒丸PAを越えてしばらく走ると、左手に2基の古墳が見える。これが木村古墳群の久保田山古墳(くぼたやま)と天乞山古墳(あまごいやま)である。

木村古墳群は、雪野山と布施山との間に挟まれた平野部の南端に位置し、5基以上の古墳から構成された、古墳時代中期の滋賀県下最大規模の古墳群である。名神高速道路の工事などで多くの古墳が失われたが、残された久保田山古墳と天乞山古墳の2基の古墳は、平成2年に県の史跡として指定され、復元整備された。

木村古墳群は、ケンサイ塚古墳、石塚古墳、入谷(いたち)古墳、久保田山古墳、天乞山古墳等ので構成され、現在では久保田山と天乞山古墳が残るのみだが、石塚古墳については墳丘が失われたものの、周濠が残っていることが確認されている。また、ケンサイ塚古墳は、墳丘径が70×80m、高さ10mの県下最大の円墳であることがわかってている。

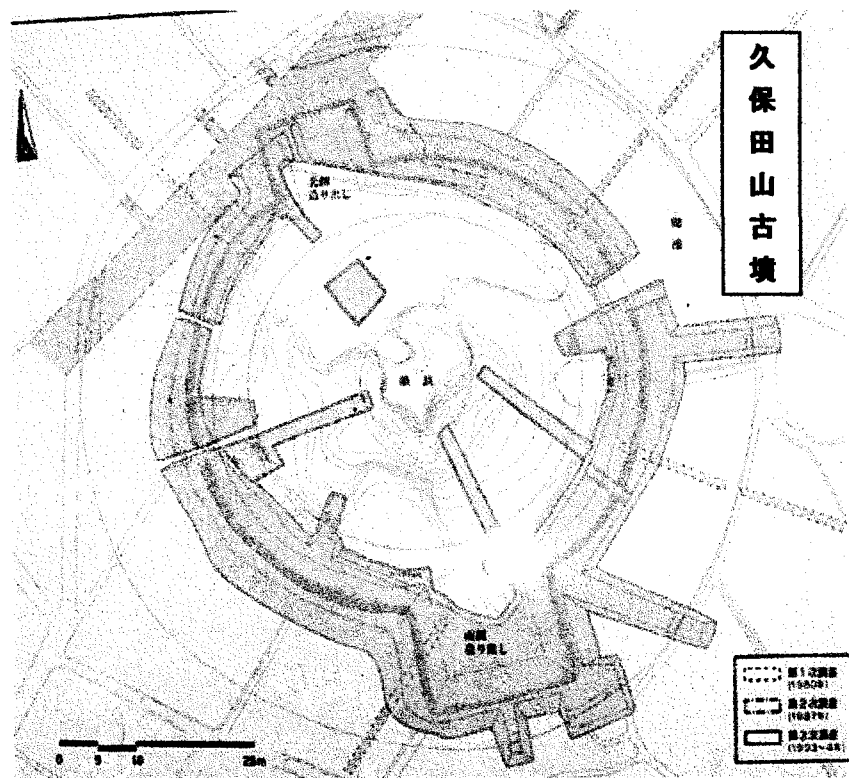
#### 久保田山古墳

久保田山古墳は、直径57m、高さ5m以上の円墳で、南北両端に造り出しの付く類例の少ない形状で、周囲に周濠を巡らしている。墳丘は上下2段に分かれており、周囲に埴輪を立て並べていた。出土した埴輪のほとんどは円筒埴輪だが、造り出しの部分には朝顔形埴輪が立てられていた。また、墳丘外面は割石による葺石で全体



水生あかね古墳公園 古墳群 古墳の位置

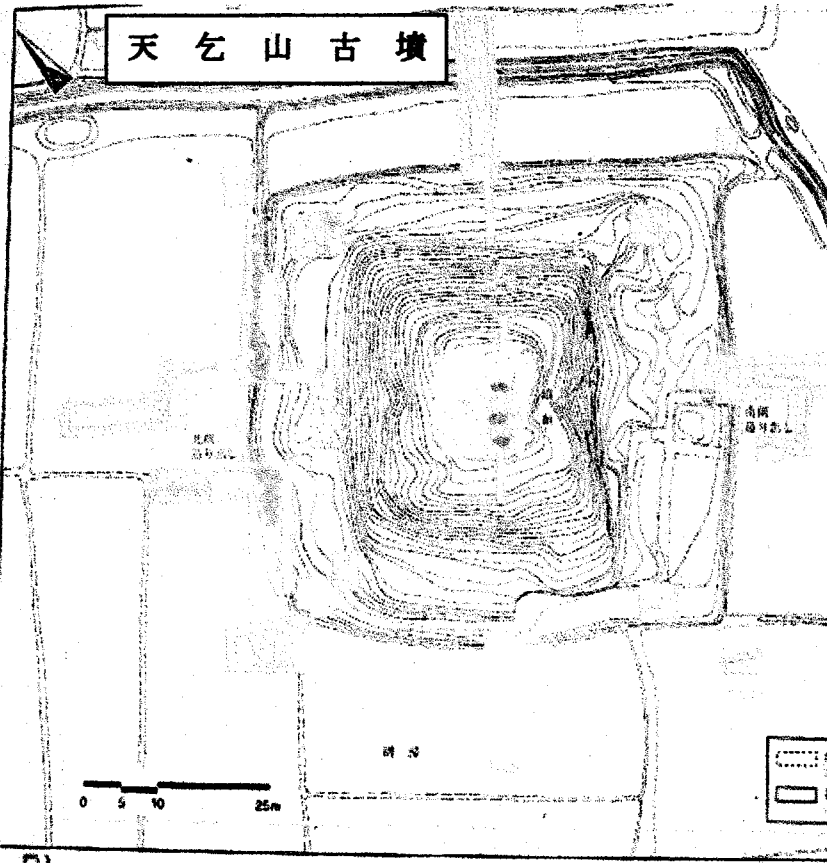
が覆われていた。埋葬施設の構造は明らかでないが、石室の一部と思われる石材が出土している。  
 古墳の築造年代は、出土品と墳丘の形状から5世紀後半代と考えられる。  
 現在は、葺石、信楽焼で再現した約390個の円筒埴輪が並べられ、当時の姿を再現、古墳の規模の大きさや壮麗さをあらためて実感することができる。



## 天乞山古墳

天乞山古墳は、一辺が約80m、高さが推定2m程度の方墳で、南北両端に造り出しの付く特異な形状の古墳、方墳としては滋賀県下最大規模、全国でも有数の規模を誇る。

墳丘は上下2段に分かれ、西側の造り出し部を中心として葺石を貼り付けている。埋葬施設は明らかでないが、石室と思われる石材が確認されていることから竪穴式石室と考えられている。古墳の築造年代は、出土品と墳丘の形状から5世紀後半代と推定される。



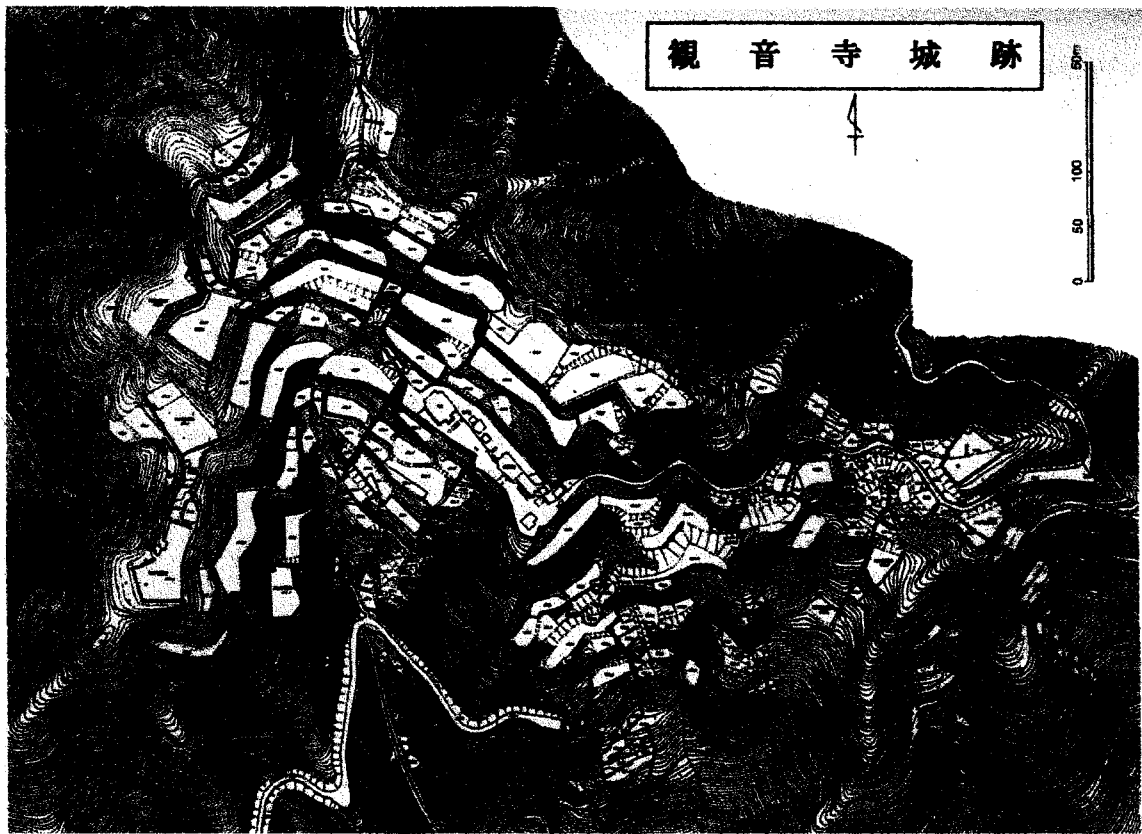
## 観音寺城跡

観音寺城は近江国守護で近江源氏の嫡流である佐々木六角氏の居城として築かれた山城である。日本五大山城のひとつとして数えられる。六角氏がいつ観音寺城を築いたのかは明確ではないが、建武二年（一二三五）の太平記には、佐々木氏頼が北畠顕家軍を阻止しようとし、観音寺城に立て籠もったという記録が認められる。その後もここを拠点として江北の京極氏や浅井氏と境目の戦いを繰り返してきたが、今のような山城としての形が整ったのは、大永の末年から享禄年間（一五二八〜三二）にかけて行われた大改修の後と考えられている。

六角氏はこの地で、守護として活躍し在地領主と被官として南近江を治めていた。近江より東の者共は必ず観音寺城の麓を通らねばならず、六角氏の権力は大きなものであった。しかし、室町文化の粹を誇った観音寺城も、將軍足利義昭を擁して上洛しようとした織田信長に対して反信長方についていたためそれを拒否。結果、観音寺城は信長方に包囲され攻撃されて落城してしまった。

城は織山と呼ばれる大きな独立丘陵の南斜面に築かれている。中央の谷筋の大手道を中心に、山頂間近の本丸跡を扇の要として、扇を開いたように鱗状の無数の曲輪が配置されている。城へは山下町があった石寺から車を止めて大手道の石段を登っていく方法と車やタクシーで五個荘側から観音林道駐車場のある淡路丸を目指す方法がある。いずれも、観音正寺に到達する。城跡は、境内左手脇の一段下がった道から境内を通り越すように尾根へと登っていく。

しばらく登ると前方に開けた部分に出る。ここが、本丸である。かなり広い空間が望める足下には礎石らしきもの、奥には低い石垣と虎口を認めることが出来る。さらに、奥に進むと伝平井丸に降りることが出来る。ここもかなり広い空間が望める。入り口にはやや大きな石垣で造られた虎口を認めることが出来る。さらに一段下の曲輪として、池田丸の曲輪を見ることが出来る。これらの西側の尾



## 安土城跡

根上が観音寺城の中心部だ。そこからさらに山頂部、観音寺周辺の山腹、東側尾根と大小の曲輪が石垣を持ちながら連なる。いずれの曲輪にも石組みの柵や石墨、階段などを見ることができ、安土城に先行する近江の技術力の高い山城の築城の様子を見ることが出来るであろう。

『近江の城ベスト50を歩く』木戸雅寿

天正三年（一五七五）十一月二十八日、織田信長は、突然それまでの本拠地であった岐阜城と家督を、嫡男の信忠に譲ることを宣言した。自らは天正四年正月中旬に、近江国安土山に城を築くこととして総奉行を丹羽長秀に命じた。信長は当時、岐阜城に住んでいたが、永祿八年（一五六五）に三好一族が足利義輝を殺害した時に、岐阜から京へ兵を送るのにまる一日かかり京を奪還されそうになったという苦い経験から、岐阜へも半日、京へも半日の行程でいける安土山に目をつけて城を築いたといわれている。安土山は比高差九・七メートル、約九〇ヘクタールあるひょうたん形をした低丘陵で、現在は戦後の干拓により、周りにあった琵琶湖の内湖を埋められてしまっているが、当時は四方を湖に囲まれ陸続きはごく一部というような天然の要害であった。信長はここに稔石垣からなる巨大な城を築いた。

記録では、天正四年四月一日より、大石をもつて石垣積みが始まされ、天主の造営から開始されたとある。参加した人々は、尾張・美濃・伊勢・越前・若狭・畿内の諸侍と京・奈良・堺の土工と諸職人である。瓦焼きは奈良衆と唐人一宮に命じ天主は唐様に作られたという。石垣の石は、観音寺山・長命寺山等の近隣から集められて、その数は三千という。「蛇石」という名石などは、三千人を以てしても山に上ることが出来なかつたことが『信長公記』には記されている。昼夜を問わずの突貫工事の末、天正七年（一五七九）には天主が完成した。城の完成を見たのは、天正十年（一五八二）のこ

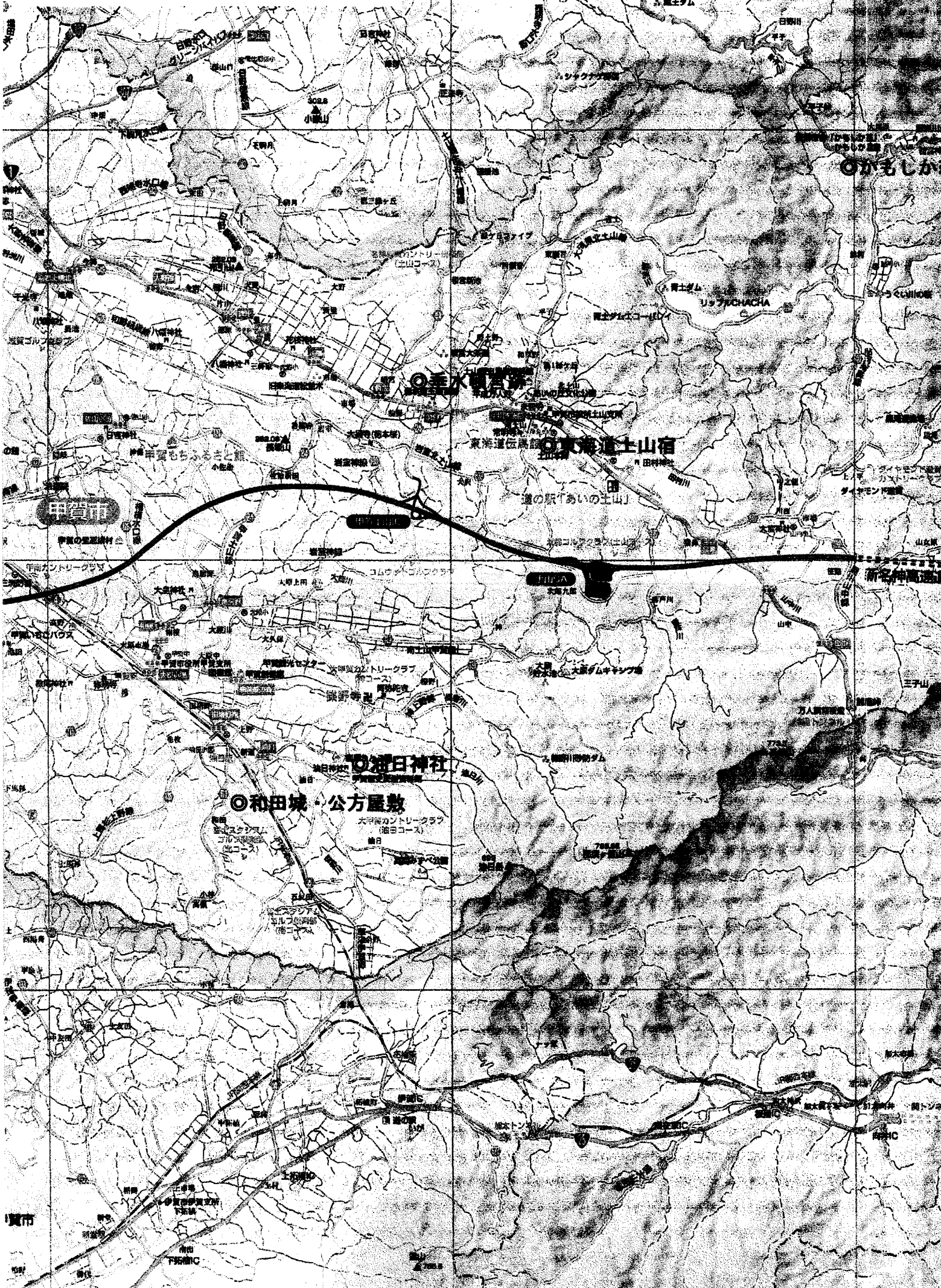
とである。その年の正月には家臣を集め完成祝賀会が開かれている。その時の様子によると、御一門衆をはじめ、他国衆や安土衆が呼び寄せられ、総見寺から本丸に案内され、御殿主では天皇の間や御幸の間、江雲寺御殿、南殿などが披露された。これらの記載から信長は、安土城の築城段階から、正親町天皇・誠仁親王の行幸を想定して安土城を築いていたことがわかる。安土城は信長の生活の拠点、天下布武の拠点でもあり、行幸という政治的な場として築城されていた事がわかるのである。しかし、栄華を誇るはずであった城も、天正十年に起った本能寺の変の巻き添えにより焼失してしまふ。一説に犯人は明智光秀や在城していた甥の秀満というが、光秀が山崎の合戦で死を遂げた日、秀満が坂本城で自刃した時にはまだ焼亡していない。犯人はフロイスが書き残したとおり織田信雄とするのが妥当かもしれない。近年の発掘調査では、焼亡したのは天主を中心とした主郭部だけであることがわかっており、城全体の九八%はそのままの形で残っていた。本丸天主を除く城の建物の多くは、天正十三年（一五八五）の羽柴秀吉による近江八幡山城築城に際して城下町ごと移転させられたものと考えられる。移転後の城跡には秀吉が信長を弔うために墓を造営し、城と墓を聖地として守ることを捲見寺（現土地所有者）に託した。この配慮はその後、幕末まで徳川幕府でも將軍の宋印という形で代々続けられている。城の荒廃が進むなか、大正十五年（一九二六）に史跡指定され、昭和十五年（一九四〇）以降、滋賀県で続けられている調査整備により、総石垣に囲まれた織豊系城郭の出発点としての城跡が次第によみがえりつつある。

『近江の城ベスト8を歩く』  
木戸雅寿



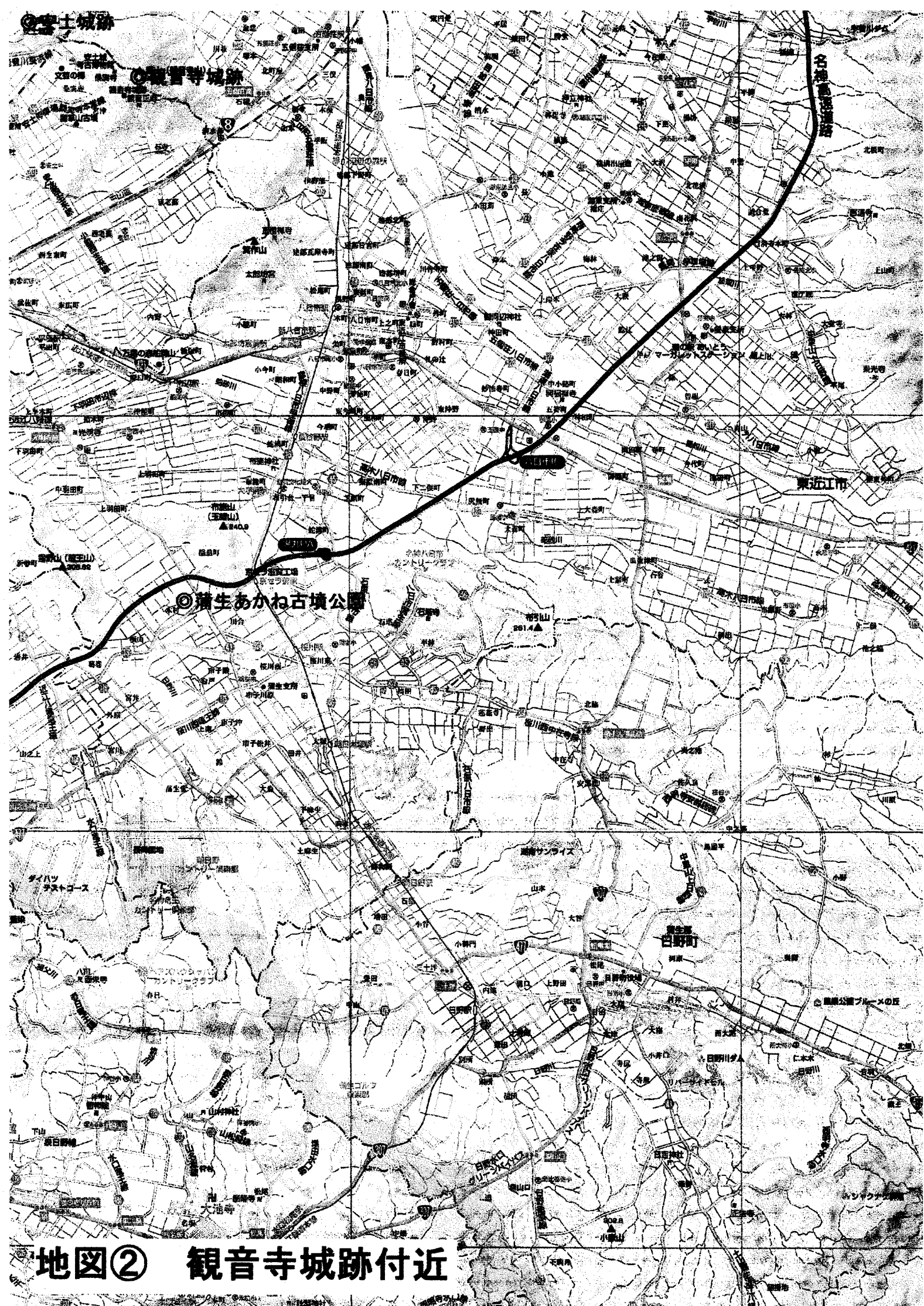
安土城跡実測図

# 地図①甲賀・土山付近



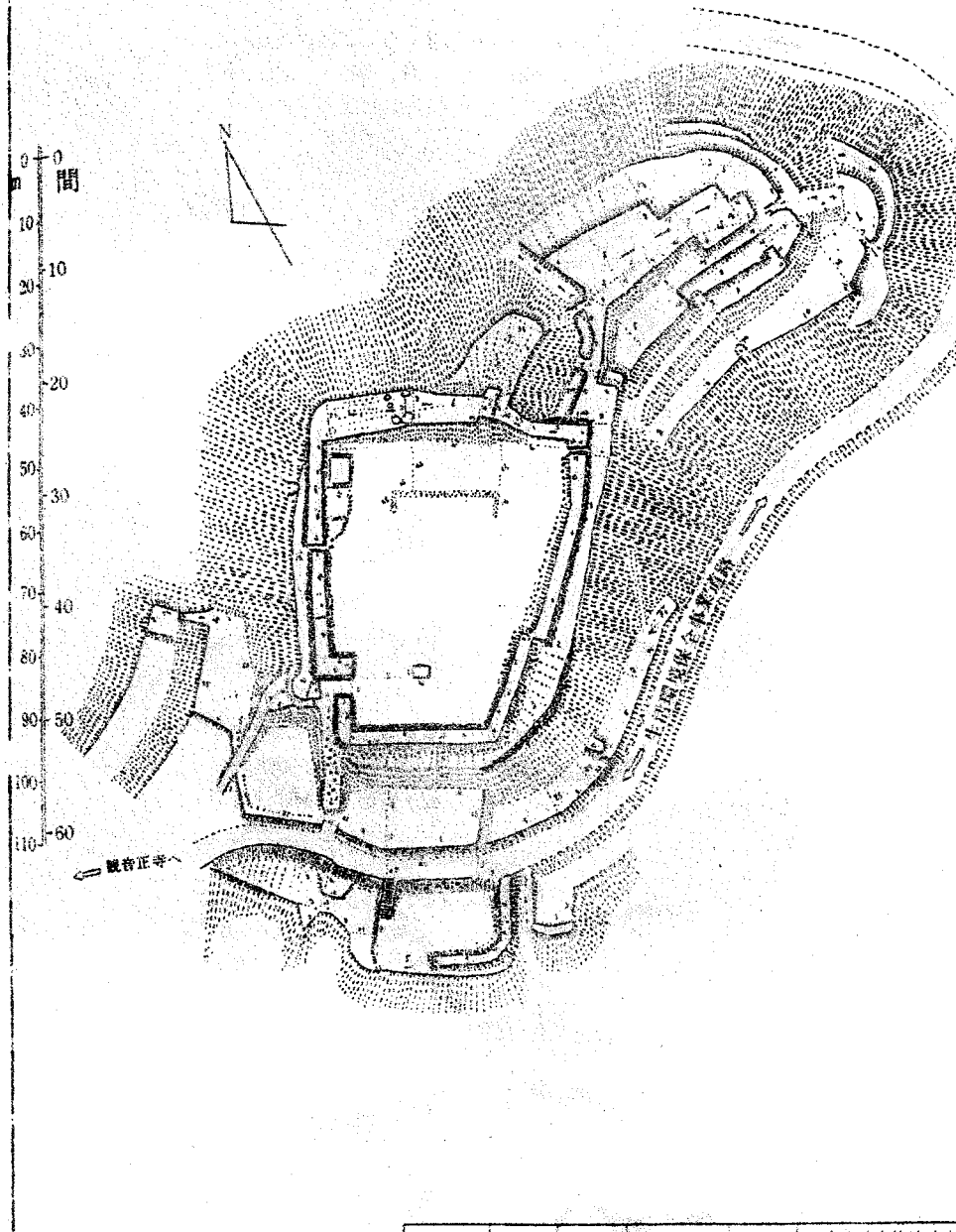
甲賀市

土山



地図② 観音寺城跡付近

観音寺城跡 丸路丸 (長谷川博美氏作図)



 備陽史探訪の会 事務局

〒720 - 0824 福山市多治米町5 - 19 - 8

TEL&FAX 084 - 953 - 6157

E-メール b-tan-kai@009191.com

公式ホームページ

<http://www3.plala.or.jp/big-eye/>